

Passivals から進行受動態へ： 英語史における統語変化

本多尚子

1. 導入

(1) のような進行受動態の出現は18世紀末とされ、その生起頻度が増加したのは19世紀中であつたとされる。

(1) ... like a fellow whose uttermost upper grinder is being torn out ...

(R. Southey, letter of 9 Oct. 1795, quoted in OED s.v. *be*)

(Cowper and Hall (2013: 130))

また、その特徴の一つとして、一時的な動作あるいは状態を表す動詞のみを含むことができる点が挙げられる。すなわち、進行受動態を含む進行形はある終結点を持つ動作や状態が「未完了」であることを示す用法である。

前述の進行受動態の出現に影響を与えたとされる構文が(2)のような *passivals* であり、当該構文に関しては Mitchell (1976) や Núñez (1996), Kranich (2010), Cowper and Hall (2013) 等で分析がなされてきた。

(2) Whereas a Brass Foundry is now building at Woolwich ...

(London Gazette, 10 July 1716, quoted in OED s.v. *brass*)

(Cowper and Hall (2013: 130))

(2) では、形態的には能動の現在分詞が生じているにも関わらず、その表層の主語はその動詞の内項と解釈され意味的には受動である。当該構文は、Mitchell (1976) によると、中英語期より出現し始めた¹とされる。また、Kranich (2010: 116) では、その出現及び消失の時期について、先行研究や彼自身のコーパス調査の結果を基に、『当該構文は中英語期から散発的に出現し

(cf. Warner (1997: 163)), 16世紀から生起頻度を増加させ、17世紀後半から18世紀にかなり一般的となり、19世紀に衰退した』と述べている。先行研究に基づけば、19世紀に passivals の生起頻度の減少と進行受動態の生起頻度の増加が共に生じていることから、当該時期に passivals が進行受動態へと置き換えられていったと推察される。しかしながら、なぜ、そしてどのような仕組みで当該時期にそのような置き換えが生じたのか、その動機とメカニズムは未だに理論的には十分には解明されていない。

本稿の目的は、進行受動態がなぜそしてどのようにして18世紀末に出現し、19世紀以降 passivals に取って代わるようになったのか、その動機とメカニズムを、未完了相を示す機能範疇の発達という観点から理論的に解明することである。

本稿の構成は以下の通りである。2節では、passivals から進行受動態への発達についての統語的先行研究である Cowper and Hall (2013) を概観し問題点を指摘する。3節では、2節で示した問題点を解決するため passivals の特徴に関する先行研究を概観し、初期中英語期に観察される passivals は受動の意味を伴う現在分詞を含まないのに対し、後期中英語期から16世紀までに観察される passivals は、受動の意味を伴う現在分詞を含み未完了の語用論的含意を持つ一方で、未完了相を示す機能範疇は未だ含まない構文であったことを示す。加えて、17世紀以降 passivals が（受動）態と（未完了）相の両方を示す機能範疇を含む構文となった要因として、未完了と対となる関係概念である完了及びそれを表す完了相表現（完了形）の発達が影響を与えた可能性を示す。4節では、passivals から進行受動態が出現するに至った動機とメカニズムを提示する。5節は結論である。

2. 先行研究：Cowper and Hall (2013)

Passivals が進行受動態の起源であると指摘する先行研究は Mitchell (1976) や Kranich (2010) 等いくつか存在する一方、passivals からどのようなメカニズムで進行受動態が派生されたのかを理論的に解明した研究は筆者の知る限り少な

い。2節では、その数少ない先行研究の中でも重要かつ最近のものとして Cowper and Hall (2013) を概観し、その問題点を指摘する。

Cowper and Hall (2013) は、passivals と進行受動態の構造をそれぞれ (3) と (4) であるとしている。そして、18世紀末に (3) が (4) へと再分析され始めたのは、態と相両方に関する素性を持つ機能主要部 Voice-Aspect (以下 VAsp) が Voice と Aspect (以下 Asp) にそれぞれ独立し投射するようになったためだと主張している²。また以下の構造における *be* 動詞は全て *be* 挿入と呼ばれる操作で挿入された、独自の意味を持たない要素である (Cowper and Hall (2013: 132)) ことに留意してほしい。

(3) [TP [DP our garden]i [T' [T is] [VAspP [VAspP [VAsp -ing] [_vP [DP *t*i] [_v' [_v put] [PRES] [PROCESS] [PASSIVE]]]]]]]

[PP in order]]]]] [PP by a man]]]]] (cf. Cowper and Hall (2013: 133))

(4) [TP [DP the house]i [T' [T was] [AspP [Asp being] [VoiceP [Voice -en] [_vP [_v build] [PAST] [Imperf.] [PASSIVE]]]]]]]

[DP *t*i]]]]]]] (cf. Cowper and Hall (2013: 137))

(3) では、*v*P が、相に関する素性 [PROCESS] と態に関する素性 [PASSIVE] を持つ VAsp 主要部 (-ing) と併合した結果、VAspP が形成され、動作主を表す PP (by a man) が VAspP に右付加される。また、接辞 *-ing* を具現化させるため *put* が VAsp へと移動する。VAspP は、時制に関する素性 [PRES] を持つ T と併合し T' が形成され、さらに T の EPP 素性を満たすため、*v*P 内の DP がその指定部へと移動し TP が形成される。また、現在時制屈折を形態的に具現化するための最終手段として T 位置に *be* が挿入される。

他方、VAsp が Voice と Aspect にそれぞれ分かれて投射されるようになった (4) の構造では、*v*P が形成された後 Voice (-en) と *v*P が併合しまず VoiceP を形成する。また、接辞 *-en* を具現化させるため *build* が Voice へと移動する。さらに、Asp (-ing) と VoiceP が併合し AspP を形成する。また、*-ing* を形態的に具現化するための最終手段として Asp 位置に *be* が挿入される。AspP は、時制に関する素性 [PAST] を持つ T と併合し T' が形成され、さらに T の EPP 素性を満た

すため、*v*P内のDPがその指定部へと移動しTPが形成される。また、過去時制屈折を形態的に具現化するための最終手段としてT位置に*be*が挿入される。

Cowper and Hall (2013) の分析は、passivalsからの進行受動態の出現を統語構造の変化という形で理論的に解明しようとしている点は非常に興味深いが、主に2つの問題点がある。一つは、そもそもなぜVAspが最初に導入され、その後VoiceとAspにそれぞれ分かれて投射しなければならなくなったのか、その動機が不明であることである。それが説明されない限り、「英語史のある時期においてVAspが導入され、そしてその後VoiceとAspにそれぞれ分かれて投射しなければならなくなった」とすることはそのような変化の動機付けという点では実質的に何も述べておらず、結局事実を別の言葉で述べ換えているだけということになる。もう一つは、passivalsの派生にとって不可欠なVAspが、どのような仕組みで英語において採用されていたのかが解明されていないことである。

第1の問題に関しては、Roberts and Roussou (2003) で提案された素性融合 (feature syncretism) の観点から説明できるかもしれない。Roberts and Roussou (2003: 201) では、素性融合を “the presence of more than one formal feature in a given structural position” と定義し、また、“(…) the structure with the least occurrences of multiple features on single positions is the simplest (Roberts and Roussou (2003: 201))” とも述べている。すなわち、より少ない数の併合により作られ、最低限の素性融合しか含まない構造が最も単純であり、派生にとって最も好まれるものであると考えられる。passivalsの分析にこの考えを適用すると、以下のような理論的説明を得られる可能性がある。もともとはVAspが持つ態の素性と相の素性を単一の接辞 *-ing* が併合し具現する構造がとられていたが、能動態・受動態を問わず進行形の生起頻度が高まるにつれ、受動態専用の形式 *-ed* の存在もあり、当該接辞の意味が漂白化され相の意味しか表せなくなった。その結果、態の情報を表す別のマーカーを併合せざるを得ず、VoiceとAspが別々に投射されるようになった。実際、Araki and Ukaji (1984: 443) によれば、単一形の受動態でありながら、進行相あるいは完了相を表す用法は近代英語期当時まだ頻繁に用いられたが、当該用法は19世紀以降衰退・消失し

たとされている。しかしながら、Roberts and Roussouで提案される枠組みを採用したとしても第2の問題、すなわち、VAspがどのような仕組みで英語において採用されていたのかという疑問は残る。本論文では、4節で詳細に述べるが、これらの問題を解決可能なpassivalsから進行受動態への発達に関する統語分析を提案する。

3. Passivalsの意味上及び統語上の変化

3節では、英語史を通じたpassivalsの意味上及び統語上の変化について先行研究を踏まえ概観する。1節で指摘したように(2)のようなpassivalsは形態的には能動の現在分詞を生じているにも関わらず意味的には受動と解釈される構文であり、(1)の進行受動態とほぼ同義、すなわち、「～は一時的に…されている最中である」と解釈されると多くの先行研究において分析されてきた。他方、最近では、Kranich (2010) や Hosaka (2014) において、少なくとも古英語期や中英語期における進行形は「～は一時的に…している／されている最中である」と意味しているのではなく、「～は(一時的か永続的にかに関わらず)…(途中)の状態で存在している」という意味で使われていた可能性が指摘されている。そこでは、*be*動詞は存在の*be*, *-ende* (ing)は動作的であるというよりはむしろ一定期間継続している「状態」を叙述する形容詞的要素であるとみなされる。言い換えると、当該構文における*-ende* (ing)は態中立的であり、受動の意味はまだ獲得していなかったと考えられる。

当時のpassivalsが未完了相を示す表現とはなっていないとするKranichやHosakaの分析を支持しうる証拠として、古英語期から中英語期には(5)-(7)で示されるような近代以降の英語では決して見られない進行形の用法が存在していることが挙げられる。

- (5) *gyf þonne Frysna hwylc . . . ðæs morðorhetes*
 if on the other hand the Frisians one of this feud
 myndgiend wære
 mentioning be (Beowulf, 1104f.)
 'if on the other hand one of the Frisians would mention this feud'
 (Kranich (2010: 86))

(6) of Danai þære ie, seo is irnende of norþdæle
 from Danai that river which is running from the northern-part
 (Orosius 8.23f.)

‘from Danai that river which runs from the northern part’
 (example from Traugott 1972: 90, translation adapted from her)

(Kranich (2010: 86))

(7) the flood is Into the grete See rennende
 the flood is into the great Sea flowing

(Gower, Confessio Amantis, 7.567)

‘the flood flows into the great Sea’

(example from Mossé 1938: II, 184) (Kranich (2010: 86))

(5) の *ðæs morþor-betes myndgiend wære* ‘mention this feud’ は一瞬で完結するイベントであり、ある一定期間の間の展開として概念化されるイベントではない。話者が興味があるのはあくまでその状況の結果であり、その過程ではない。従って、*-ende* (ing) で示される動作や状態は未完了相を表すものとは考えにくい。また (6) の *is irnende* ‘runs’ や (7) の *is . . .rennende* ‘flows’ は川や洪水の永続的な性質や特徴的な性質を表しており、一時的な動作や状態を表すものではない。(5) から (7) の例から、古英語期から中英語期においては *-ende* (ing) で示される動作や状態が必ずしも未完了相を表すものではないことは明らかであり、この点は Visser (1973) でも同様の言及がなされている。

また、当時進行形構文によく現れていた動詞は変移動詞や移動などを表す自動詞（非対格動詞）であり、他動詞はあまり見られなかったと指摘されている。実際独自のコーパス調査でも進行形構文全体のうちで他動詞を含んでいるものは、古英語期は 2.69%、中英語期は 10.86% しか存在しておらず、初期近代英語期の 19.22%、後期近代英語期の 28.44% と比べると明らかに少ない³。

本稿も古英語期から中英語期にかけての *passivals* を含む進行形は、存在の *be* と継続の「状態」を示す形容詞的・態中立的な *-ende* (ing) 分詞を含む構文であると仮定し、未完了相との関わりは未だ確立されてはいなかったと主張する。

ここで、古英語期から中英語期においては態中立的で、未完了相との関わり

も持たなかった *passivals* がいつ、そしてどのようにして受動の意味や未完了相との関わりを持つようになったのであろうかという疑問が生じる。本分析では、初期近代英語期から後期近代英語期にかけての進行形における他動詞の使用頻度の増加が *passivals* の機能変化につながった可能性を指摘する。表1は進行形全体と他動詞進行形の50万語当たりの生起頻度を時期ごとにまとめたものである。

表1 進行形全体と他動詞進行形の生起頻度 (50万語当たり)

	OE	ME	EModE	LModE
進行形全体	107.7	112.75	133.2	536.6
他動詞進行形	2.9 (2.69%)	12.25 (10.86%)	25.6 (19.22%)	152.6 (28.44%)

表1より、特に初期近代英語期から後期近代英語期にかけて他動詞進行形の生起頻度及び進行形全体に占める割合が増加し続けていることが分かる。このことは、*be* 動詞 + 現在分詞 (-ing) が状態的解釈だけでなく動作的解釈も持ちうるものとして再分析され始めたことを示唆するものである。すなわち、「存在の *be* 動詞 + 形容詞的現在分詞」が存在の *be* 動詞における意味の漂白化をきっかけとして「繫辞の *be* 動詞 + 動詞的現在分詞」へと再分析され始めたと考えられる。より具体的には、もともとは「DP主語 + 存在を意味する本動詞 *be* + 主語の状態を表す形容詞的分詞」だった構文が、*there* 構文の使用頻度が増加した影響で、本動詞 *be* の意味が漂白化し、繫辞の軽動詞 *be* へと再分析され、その補部に形容詞的分詞だけでなく動詞的分詞もとることが可能となり、他動詞進行形が出現、その後も頻度を増加させたと考えられる。同様の過程は他の構文でも観察される。例えば、Honda (2012) では、*get* 受動態の発達過程を「起動の本動詞 *get* + 主語の状態を表す形容詞的分詞」から、本動詞 *get* の意味が漂白化し、受動の軽動詞 *get* へと再分析され、その補部に動詞的分詞もとることが可能となり、*get* 受動態が出現したと分析している。本分析は、Honda (2012) で提案された考えを基本的に踏襲し、*passivals* の分析に応用する。

もう一つ重要な点は、他動詞進行形の増加により、それまで「存在の *be* 動詞 + 形容詞的現在分詞」として解釈されていた *passivals* が「繫辞の *be* 動詞 + 受動の意味を持つ動詞的現在分詞」として再分析される可能性が生じたことである。より具体的には、「DP 主語 + 存在の本動詞 *be* + 主語の状態を表す形容詞的現在分詞 (*building* など)」を含む構文が、「他動詞的現在分詞の補部位置から移動した DP 主語 + 繫辞の軽動詞 *be* + 他動詞的現在分詞 (*building* など)」へと再分析される可能性が生じた。他動詞的現在分詞の補部位置から主語位置への移動はいわゆる受動化であり、ここから受動の意味が導かれる。このような DP の性質の変化についても、*passivals* の発達過程だけでなく *get* 受動態の発達過程においても見られる (Honda (2012: 82) を参照)。

また、動作的解釈を持ちうる他動詞進行形の一部事例においては、Tenny (1994: 68) で提案されるように、動詞の補部にある直接目的語が文脈上イベントの *delimiter* として機能し、その結果、現在分詞が語用論的含意として未完了の意味を持つ場合が生じたと仮定する。より具体的には、*build the house* で示されるイベントはその家 (*the house*) が完成した時点で終了するものであり、*building the house* (= その家を建てている) は家を建てるというイベントが継続可能な状況、すなわち、その家が未完成であり、当該イベントが未完了であることが含意されている⁴。さらに、前述の他動詞進行形の影響で、*The house is building.* のような *passivals* の主語が、*build* の直接目的語が当該位置に移動したものと類推・再分析される可能性が生じ、*passivals* に含まれる現在分詞もこのような未完了の語用論的含意を持つと分析されたと仮定する。この語用論的含意としての未完了の意味が、以下で詳しく扱うが、後の未完了相を示す機能範疇の出現に影響したと考えられる。

次に、未完了相の対となる概念である完了相の発達について考察する。一般に *have* 完了として知られる「*have* + 過去分詞」は、中英語期において既に複合的な述語動詞として捉えられていた一方、機能的には過去形との分化は初期近代英語期までそれほど明確ではなかったとされる。その証拠として Yanagi (2004) では以下の2つの統語的証拠が挙げられている。第1に、中英語期においては、(8) のような *have* 完了と単純過去形とを結びつける等位構造が存在し

ていることである⁵。

- (8) His brother, which that knew of his penaunce, Up caughte hym and to
his brother which that knew of his penance up caught him and to
bedde he hath hym broght.
bed he has him broght (c1390 CT V. 1082-3/Fischer (1992: 259))
(Yanagi (2004: 75))

第2に、中英語期から初期近代英語期にかけて、(9)で示されるように、過去の時点を示す副詞表現と *have* 完了が共起する例が存在することである。対照的に、17世紀以降の英語では(10)で示されるように当該事例は容認されない。

- (9) a. “I am youre doghter Custance,” quod she, “That whilom ye han
I am your daughter Custance said she that once you have
sent unto Surrye”
sent to Syria (c1390 CT ML II. 1107)
(Denison (1993: 353))

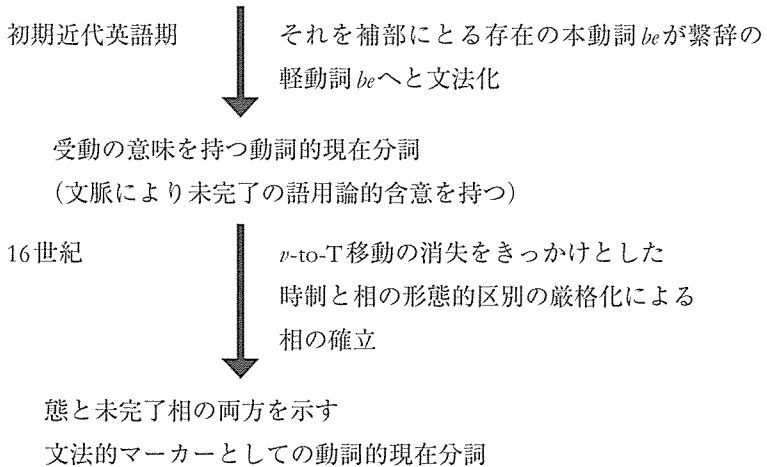
- b. Olde men which haue vsed in time passed to bable In barbarike
language (c1510 Barclay, Mirr. Good Mann. (1570) Aj)
(Visser (1966: 751 (§ 805)))

- (10) *I have told you yesterday/at four. (cf. I told you yesterday/at four.)
(Yanagi (2004: 96))

さらに、Yanagi (2004) は、単純過去形と *have* 完了が機能的に分化している言語と、そうではない言語の通言語的比較に基づき、単純過去形と *have* 完了が17世紀初頭に機能分化を始めた要因は16世紀の *v*-to-T 移動の消失である可能性を指摘する。Yanagiによると、*v*-to-T 移動を持つ言語では、単純過去形と *have* 完了が機能的に分化しない一方、*v*-to-T 移動を持たない言語では、両者は機能的に明確に分化しているとされる。また、英語は古英語期から16世紀までは単純過去形と *have* 完了が機能的に分化していない言語であったが、16世紀に *v*-to-T 移動が失われた結果、両者が機能的に分化する言語となったと分析している。16世紀の *v*-to-T 移動の消失をきっかけとして完了相の確立が生じたとする Yanagi の分析が正しければ、*v*-to-T 移動の消失の結果、法助動詞と完了の

3節では、passivalsに関する先行研究を踏まえ、passivalsが含む現在分詞が、(13) でまとめられるような統語的・意味的变化を経験していると仮定した。

(13) 形容詞的分詞



4. 提案

4節では、passivalsからの進行受動態の出現過程について、2節で概観した先行研究の問題点や3節で概観したpassivalsの特徴の変化を踏まえ、本稿での統語分析を提案する。

まず、中英語期において観察される passivals は、Kranich (2010) や Hosaka (2014) で提案されるような「～は (一時的か永続的に関わらず) … (途中) の状態で存在している」という意味の構文であると仮定し、そこでは *be* 動詞は存在の意を持ち、現在分詞は継続を表す形容詞として機能していると分析する。

(14) [TP the house_j [T' [T is_i] [_{NP} [_r t_i] [_{VP} t_j [_{V'} [_V t_i] [_{AP} buildende]]]]]]

特に、中英語期前半までは、虚辞 *there* の存在は随意的であり、存在の *be* 動詞との共起関係が十分に確立していなかったことが知られている。そのため、(14) でも虚辞 *there* は含まれていないが存在の *be* 動詞を用いることは可能であった。

初期近代英語期に入ると、虚辞 *there* と存在の *be* 動詞との共起が義務的になり、(14) のような例に含まれている *be* 動詞を存在の意味で解釈することは難しくなった。その結果、*be* 動詞の意味の漂白化が進み、当該の *be* 動詞は T に基底生成される繫辞の *be* へと再分析された。繫辞の *be* は形容詞的分詞だけでなく動詞的分詞もとることが可能なため、後続する現在分詞を動詞的現在分詞として解釈する可能性が生じた。実際、他動詞を含む進行形構文の頻度がかなり増えた結果、(14) は他動詞進行形構文との類推で、受動の意味を持つ動詞的現在分詞を含む (15) の構文であると再分析された。また、Visser (1973) では、当該時期の (15) の構文の代わりに、*The house is built.* のような単純現在形を用いた受動文が用いられることも多かったとしており、現代英語において *The house is built.* と *The house is being built.* の間で保持されているような完了 / 未完了といった相の区別は当時は十分には確立されていなかったと考えられる。もし未完了の解釈が (15) に補われるとしたら、それは文脈からもたらされた語用論的含意に過ぎず、passivals 全てが未完了の解釈を含むことを保証するものではない。

(15) [TP the house_i [T [T is] [VoiceP [Voice -ing] [VP [v build] *t_i]]]]
[PASSIVE]*

17世紀に入ると、Yanagi (2004) で提案されるように、未完了と対となる概念、すなわち完了を表す完了構文と単純過去形との区別が明確化され、VP と TP との間に新たに相を表す機能投射 Asp が出現した。完了相と Asp との関わりが確立した後、すなわち17世紀後半に、(15) のような passivals が持っていた「未完了」を表す語用論的含意が意味的に強化され、態のみを表す要素が現れていた Voice が、態と相の両方を表す要素が現れる VAsp へと再分析される。

(16) [TP the house_i [T [T is] [VAspP [VAsp -ing] [VP [v build] *t_i]]]]
[IMPERF.]
[PASSIVE]*

本稿では、17世紀後半に出現したこの (16) の passivals こそが進行受動態の直接の起源となる passivals であると主張する。時制と相の形態上の区別は17世紀初頭にほぼ確立したが、当該時点では態と相の形態上の区別は必ずしも明示的ではなかった。単一形の受動態を完了受動態あるいは進行受動態の意味で使用

することは18世紀までまだ頻繁に行われていたことがAraki and Ukaji (1984) やVisser (1973) で指摘されている。実際、19世紀初頭でさえも、文法家の間では進行受動態への批判は根強く、Jones (1833: 143, 145) は、“all redundant, or unnecessary words should be avoided.”と述べている部分で、“is being built”のような進行受動態に言及・批判し、*being*を除いた“*is built*”を用いれば十分であると主張している。他方、進行形や完了形を含む構文全体の頻度は18世紀末までに激増し、*-ing*や*-en*といった接辞の意味は漂白化され、相専用の形式と一般に認識されるようになった。その結果、18世紀末にVAspはVoiceとAspに分離し、Aspは*-ing*接辞を含みVoiceは*-ed*接辞を含むようになった。そのため、(17)の構造が生じ、当該構造から*The house is being built.*のような進行受動態構文が派生された。

- (17) [TP the house_i [T' [T is] [AspP [Asp being] [VoiceP [Voice -en] [VP [V build] [PRES] [IMPERF.] [PASSIVE] _{t_i]]]]]]}

5. 結論

本稿では、進行受動態がなぜそしてどのようにして18世紀末に出現したのか、その動機とメカニズムを、未完了相を表す専用形式の発達という観点から理論的に解明することを試みた。特に、passivalsの特徴に関する通時的変化に着目し、中英語期におけるpassivalsや初期近代英語期初頭から17世紀前半までのpassivalsはCowper and Hall (2013)により提案された構造を持つpassivalsとは意味的にも機能的にも別物であり、態と相の両方を表す文法マーカーとしての現在分詞を含むpassivalsが出現したのは17世紀後半であると主張した。特に、当該構文の出現と大きく関わったのが17世紀初頭に始まった完了構文における完了相及びAsp (P)の発達であり、それらとの類推によりpassivalsが含むVoiceがVAspへと再分析され進行受動態の直接の起源となるpassivalsが出現したと主張した。最後に、VAspに基底生成されていた*-ing*接辞が、進行形構文の頻度の増加に伴い意味の漂白化を受け相の情報しか表すことができなくなった

ため、V_{Asp}をVoiceとAspに分離しそれぞれ投射させる構造が生まれ、当該構造から進行受動態が派生されたと主張した。

注

¹ 本稿では以下のような標準的な英語史の時代区分を仮定している。古英語期 (Old English, OE) は700年から1100年まで、中英語期 (Middle English, ME) は1100年から1500年まで、初期近代英語期 (Early Modern English, EModE) は1500年から1700年まで、後期近代英語期 (Late Modern English, LModE) は1700年から1900年まで、そして現代英語期 (Present-day English, PE) は1900年以降である。

² 査読者より、V_{Asp}という機能範疇はpassivalsに特有であるのか、それとも他の構文でも観察されるのかという質問を受けた。Cowper and Hall (2013: 133)では、passivalsだけでなく他の構文にも含まれる機能範疇としてV_{Asp}を仮定している。彼らは*You are fishing*のような進行能動態の文の構造として (i) を仮定している。

(i) [_{TP} [_{DP} you_i] [_{T'} [_T are] [_{V_{Asp}PP} [_{DP} *t*_i] [_{V_{Asp}'} [_{V_{Asp}} -ing] [_{LP} [_r fish]]]]]]]]

[PROCESS]

(cf. Cowper and Hall (2013: 133))

また、彼らは能動態のように単純形で表される態を無標の態 (Unmarked Voice) とし、V_{Asp}が有標な [PASSIVE] 素性を持たなければ当該主要部は能動態とみなされるとしている。すなわち、進行形を含む文は、能動態か受動態かに関わらず、V_{Asp}を含んでいるが、当該主要部が持つ素性は、自動詞進行能動態や他動詞進行能動態では [PROCESS] 素性のみ、passivalsでは [PROCESS] 素性と [PASSIVE] 素性という違いがある。

³ 本研究で使用したコーパスは以下の4つであり、それぞれ正式名称はThe York-Tononto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2), The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), The Penn Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE) である。

⁴ 査読者より、他動詞の目的語と未完了解釈の関係を支持する経験的証拠、例えばコーパス調査等でboundedな目的語をとる他動詞の方が早く当該構文に現れ始めることが示されるなどがあるかどうかという質問を受けた。この点に関しては今後の研究課題としたい。

⁵ 査読者より、過去形と現在完了形の等位接続そのものは両者の機能分化が起こっている現代英語でも可能であり、(8)を過去形と現在完了形が機能分化していない証拠とすることには疑問があるとの指摘を受けた。確かに、両者の等位接続そのものは現代英語でも可能であるが、そのような等位接続を含む構文の現代英語における相対頻度と近代英語以前のそれとの間に差が見られる可能性はある。もし過去形と現在完了形の等位接続を含む構文の現代英語における相対頻度が当該構文の近代英語以前の相対頻度よりも明確に少ないとすれば、過去形と現在完了形の機能分化が進んだ結果、当該構文の頻度が減ったと考えることは可能だろう。当該仮説を裏付けるための当該構文に関するコーパス調査及び分析に関しては今後の研究課題とする。

⁶ 査読者より、当該時期にVoiceと独立して機能範疇 Aspが導入されなかったのはなぜかという質問を受けた。本分析では、*-ing*や*-ed*といった接辞が単独で態と相に関する情報を共に表すことができたため、VAspという機能範疇を設け、その位置に当該接辞を併合させる方がVoiceとAspを独立して投射させ、それぞれに何らかの要素を併合させるよりもより単純な構造であったからであると考え。実際、18世紀まではpassivalsだけでなく、(i)のように単一形の受動態を完了受動態の意味で使用する事例がまだ頻繁にあったとされる。

(i) a. thy lips *are scarce niped* since thou drunkenst last.

(The First Part of King Henry IV, II. iv. 170-1)

b. *Is execution done* on Cowdor? (Macbeth, I. iv. 1) (Araki and Ukaji (1984: 443))

当該事例では、受動分詞が態の情報だけでなく、相の情報も同時に表していると考えられる。

また、本分析では採用しなかったが、VoiceとAspは当該時期から独立して導入された一方、未完了相を示す専用形式としての接辞が存在しなかったため、最終手段としてVoice主要部がAsp主要部に移動し具現する必要があったと分析する可能性もある。Roberts and Roussou (2003: 210) は、移動と素性融合の関係について以下のように述べている。

(ii) (...) movement operations are always associated with feature syncretism. Since a moved element has one feature licensing it in its merged position and one triggering movement. (Roberts and Roussou (2003: 210))

その後、18世紀末にかけて当該構文や他の進行形構文の生起頻度が急激に増加した結果、接辞*-ing*は、受動態を示す専用形式*-ed*との差異化が進み、その意味が漂白化され、未完了相を示す専用形式となり、Asp主要部に基底生成された可能性が考

えられる。接辞 *-ing* が Asp 主要部に基底生成されるようになったことで、空いた Voice 主要部には、受動態を示す専用形式 *-ed* が新たに基底生成され、進行受動態が派生すると分析されうる。しかしながら、後者の分析可能性をとると、先の (i) で観察した単一形の受動態を完了受動態の意味で使用する事例を説明する際には、接辞 *-ed* は完了相を示す専用形式とはなっていないので、passivals から進行受動態への発達とは別のメカニズムを想定せざるを得なくなる。従って、本分析では前者の分析可能性を採用する。

参考文献

- Araki, Kazuo and Masatomo Ukaji. 1984. *Eigosbi* IIIA. Tokyo: Taishukan.
- Cowper, Elizabeth and Daniel Currie Hall. 2013. Syntactic Change and the Cartography of Syntactic Structures. *NELS* 42: 129–140.
- Denison, David. 1993. *English Historical Syntax*, London: Longman.
- Honda, Shoko. 2012. “On the Origin and Development of the *Get*-Passive: With Special Reference to Grammaticalization,” *English Linguistics* 29: 69–87.
- Hosaka, Michio. 2014. *Bunponkasuru Eigo*. Tokyo: Kaitakusha.
- Jones, Joshua. 1833. *English Grammar in Two Parts*, Pennsylvania: printed by Simeon Siegfried.
- Kranich, Svenja. 2010. *The Progressive in Modern English: A Corpus-Based Study of Grammaticalization and Related Changes*. Amsterdam-New York: Rodopi.
- Mitchell, Bruce. 1976. No *House is Building* in Old English. *English Studies* 57: 385–389.
- Núñez Pertejo, Paloma. 1996. The House is Building: Active Progressive with Passive Meaning. *Proceedings of the 7th International Conference of the Spanish Society for English Renaissance Studies (SEDERI 7)* : 67–72.
- Rissanen, Matti. 2000. Syntax. *The Cambridge History of the English Language*, Vol. III, 1476–1776, ed. by Roger Lass: 187–331. Cambridge: Cambridge University Press.
- Roberts, Ian and Anna Roussou. 2003. *Syntactic Change: A Minimalist Approach to Grammaticalization*. Cambridge: Cambridge University Press.
- Tenny, Carol L. 1994. *Aspectual Roles and the Syntax-Semantics Interface*, Dordrecht: Kluwer.
- Visser, Frederikus Theodorus. 1966. *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. 2. Leiden: E. J. Brill.

- Visser, Frederikus Theodorus. 1973. *An Historical Syntax of the English Language*, Vol. 3 (second-half). Leiden: E. J. Brill.
- Warner, Anthony R. 1997. Extending the Paradigm: An Interpretation of the Historical Development of Auxiliary Sequences in English. *English Studies* 78: 162-189.
- Yanagi, Tomohiro. 2004. A Syntactic Approach to the Present Perfect Puzzle in the History of English. *Studies in Modern English* 20: 73-103.

コーパス

- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Lauren Delfs. 2004. The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Early Modern English (PPCEME), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony, Beatrice Santorini and Ariel Diertani. 2010. The Penn- Parsed Corpus of Modern British English (PPCMBE) , University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Kroch, Anthony and Ann Tayler. 2000. The Penn-Helsinki Parsed Corpus of Middle English, Second edition (PPCME2), University of Pennsylvania, Philadelphia.
- Taylor, Ann, Anthony Warner, Susan Pintzuk and Frank Beths. 2003. The York-Toronto-Helsinki Parsed Corpus of Old English Prose (YCOE), University of York, Heslington.

辞書

- Simpson, Joan A. and Edmund A. C. Weiner, prepared. 1989. *The Oxford English Dictionary*, 2nd, ed. on CD-ROM Version 4.0 (2009), Oxford: Oxford University Press.

Synopsis

From Passivals to the Progressive Passive:
A Syntactic Change in the History of English
Shoko Honda

It is pointed out that the progressive passive has developed from passivals in the history of English, but the motivation and mechanism of this development have not been sufficiently analyzed. In particular, a question will arise concerning the development of the progressive passive: what triggered the emergence of the progressive passive at the end of the eighteenth century and the loss of passivals in the nineteenth century. This paper aims to account for the development of the progressive passive in the history of English with respect to the development of imperfective aspect.

Cowper and Hall (2013) provide us with the syntactic structures of passivals and the progressive passive respectively and argue that the development of the progressive passive out of passivals was caused by the split of a functional head, Voice-Aspect (VAsp), into Voice and Aspect at the end of the eighteenth century. However, they do not provide an account of the theoretical motivation of this change nor discuss how VAsp arose in the first place. Particularly, the former problem can be solved by postulating feature syncretism proposed by Roberts and Roussou (2003) and semantic bleaching, whereas the solution to the latter is unclear.

This paper suggests that passivals should be classified into three types: type (i) in ME with existential *be* + adjectival present participle, type (ii) in EModE with copula *be* + verbal present participle of passive meaning, and type (iii) since the late seventeenth century with copula *be* + verbal present participle of passive and imperfective meaning. We argue that unlike type (i) and (ii), type (iii) is the direct origin of the progressive passive and includes *-ing* as a voice and aspectual marker. This paper assumes that type (iii) appeared as an analogy to *have* perfect constructions which have been clearly distinguished from the simple past tense since the sixteenth century. The

rise in frequency of the progressive caused *-ing* to undergo semantic bleaching and become a pure imperfective aspectual marker at the end of the eighteenth century. This change also caused the introduction of passive *be*.

This paper focuses on the diachronic changes of passivals and argues that type (i) and type (ii) passivals are semantically and syntactically different from type (iii) passival proposed by Cowper and Hall (2013) and type (iii) passivals is the direct origin of the progressive passive. What caused the emergence of the progressive passive is the appearance of *-ing* as a voice and aspectual marker and its semantic bleaching that followed. The former occurred in the late seventeenth century because of the establishment of imperfective aspect as an analogy to that of perfective one. The latter was caused by the rise in frequency of the progressive in the eighteenth century and followed the introduction of passive *be*.